ぼくはけんぞく【小悪魔と旅をしたポケモン】

黒乃雨夢

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ぼくはその日、悪魔と出会った。

これは１匹のポケモンとチャンピオンを目指す１人の悪魔の物語。

※この物語はＶｔｕｂｅｒ常闇トワ様の生配信をもとに作成した二次創作です。

セリフは生配信に忠実にをモットーに書きますが物語の進行上、改変する場合がありますので予めご了承ください。

目次

＃1　ぼくと小悪魔 ―――― 1
＃2　ごめんねトワ様… ―――― 7
＃3　挑戦！バウタウンジム！ ―― 14
＃4　進化の光！エレズンとストリンダー！ ―――― 23
＃5　泣かせない！けんぞくのド根性！ ―――― 30
＃6　激突ダイマックス！ＶＳポプラ！ ―――― 41
＃7　あなたを詐欺罪と器物損壊罪で訴えます。理由はもちろんお分かりですね？あなたが皆をこんな裏技でだまし、セーブデータを破壊したからです。覚悟の準備をしておいてください。近いうち訴えます、裁判（ｅｔｃ ―――― 50
＃8　砂塵の激闘ＶＳキバナ！ ―― 59
＃9　剣と盾交わるとき！ＶＳムゲンダイナ！ ―――― 68
最終話　頂点へ挑め！トワＶＳダンデ！ ―――― 85

#1　ぼくと小悪魔

ポケットモンスター
縮めてポケモン
この世界には数百を超えるポケモンが存在し、そのポケモンをゲットし、共に戦うパートナーのことを
ポケモントレーナーと呼ぶのである。

この物語は、旅を始めて間もない小悪魔と一匹のポケモンの旅の物語…

【ぼくにはまだ名前がない】

わかっているのはエレズンという種のポケモンであること
産まれたばかりの赤ん坊であること、たったのこれだけだ。
育て屋という小さな家で産まれ、一度も出たことがない
育て屋を訪れたトレーナーの多くはポケモンの卵と一喜一憂する。
自由に外に出れないぼくだが、
そうした人々を見ていて思った。

【人々が出入りする扉の先には何があるんだろう？】
ぼくの知らない世界
気になる
気になる
見たい！見てみたい！
誰か！ぼくを連れ出して！

そんな時だった
ぼくと、きみとの出会いは

『ん？なにこいつ』
「エレズンよエレズン！発見された卵を連れ歩いてたら産まれたエレズンだよ！あんた育ててよ！」
『え？』
「この子さ、産まれてから外に出たことないんだ。あんたジムチャレンジ挑戦してるんだろ？一緒に連れてってやんな。」

『エレズン…ブサかわな感じでいいじゃん！』
「よし！じゃあ頼んだよ！」
『ありがと～！』

ぼくを外へ連れ出したのは

悪魔だった。

育て屋を出た悪魔はぼくに話しかける。

『トワはね、トワっていうのあんたはエレズンだったよね』
ト…ワ…
ぼくの…
ご主人様…
『せっかくだしニックネームつけなきゃだね！みんなー！お願いねー！』
悪魔…いや、トワは空に向けに叫ぶ

ぼくの目には誰かいるようには見えないが？
誰と話しているんだろう？
『ビビズンはだめ！もうビビがいるじゃん！あーもう！ビビさまもダメって言ってんじゃん！』
なんだか不思議な人だ…
誰かと会話しているようにも見えるけど僕にはご主人が一人で悶えながら独り言を言っているようにしか見えない…
『もうトワが決める！この子はけんぞくにします！』
けん…ぞく…
ぼくの名前…
『けんぞく！一緒に頑張ろうね！』
そういってご主人様はぼくに微笑んで、抱きかかえると
『けんぞくをみんなに紹介してなかったね、みんな！出ておいで！』
腰に付けたモンスターボールを5つ放る。
まばゆい光の中から出てきたのは5匹のポケモンたち
バケッチャ
コイキング

フワンテ
アオガラス
ラビフット
『えっとね、左からビビ、たつのこ、トワンテ、すなぎも、べこら！みんなトワの友達なんだよ！』
このポケモンたちがご主人様の友達…
ぼくの…仲間…

エレズンことけんぞくと
子悪魔ポケモントレーナーのトワ
これは２匹の出会いと冒険の物語である。

#2　ごめんねトワ様…

ぼくのご主人様、トワ様は悪魔だ
『おはやっぴー！みんな今日もありがとなーん！』
トワ様は時々独り言を言う
他のポケモンたちは気にしていないけど誰もいない空に向けてまるで会話でもいしているかのように。
でもそうして話している時のトワ様の笑顔が
ぼくは好きだ。

仲間に入れてもらったぼくだったが、産まれたばかりの非力な赤ん坊
なかなかポケモンバトルに出ることが出来ないでいた。
活躍するのはレベルが高く初期からトワ様と一緒に旅をしてきたべこら先輩やすなぎも先輩。
たつのこ先輩は…はねてばかりで参加できない。

ビビちゃんやトワンテさんはその名前や容姿もあってトワ様に可愛がられているしバトルにもそこそこ出してもらっている。

決して僕がかわいがられてないとか嫉妬とかじゃない
ただなんでだろう…
ぼくはトワ様に愛でられるだけでいいのかな…

そんな時だった。

「くさバッジ持ってる同士なのにお前のほうが強いのかよ…」
『うん！強いよ！（ドヤァ…）』
バウタウンに向かう道中、トワ様の幼馴染の少年ホップとのバトルで

おや？たつのこの様子が…？
まばゆい光に包まれたたつのこ先輩
トワ様も僕も思わず目を手で覆い隠す

光がおさまり中から現れたのは
きょうあくポケモンのギャラドス。
そう、はねてばかりだったたつのこ先輩がギャラドスへ進化したのだ。

ぼくは震えた
はじめて目にするポケモンの進化
そしてそれを見たトワ様の
『おおー！たつのこかっこよくなったぁ！いいねぇ!!!』
嬉しそうな表情。
羨ましい。
ぼくもあんな風に褒めてほしい…
強くなりたい！

バウタウンに入る直前のことだ。

僕は初めてトレーナーとのポケモンバトルに挑んだ。
『けんぞく！ようかいえき！』
「チェリンボ、このは！」
ぼくも強くなるんだ！
トワ様に喜んでもらうんだ！
ぼくのはなった渾身のようかいえきはチェリンボにクリーンヒットしチェリンボはダウン
『やったぁ！けんぞくえらい！えらいぞぉ！』

喜んで…くれた…
トワ様が…褒めてくれた！
嬉しかった。
いまならだれにも負ける気なんてしなかった！
「お願い！コロモリ！」
ぶるっ！
背筋が震えるのを感じた。
はじめて出会うポケモンだが…

ポケモンとしての本能だろうか?なんだかわからない恐怖を感じた。
「コロモリ!エアカッター!」
『でんきなら飛行は半減!けんぞく!ほっぺすりすり!』
ぼくは全力でコロモリにほっぺを擦り付ける!
コロモリへ決定打は入らなかったが動きが鈍っている…
なるほど、ほっぺすりすりは相手をマヒさせるのか…
これならいける!
『けんぞく!動き鈍ってる今がチャンス!じたばた!』
僕は手足をばたつかせコロモリへとぶつかる
しかしこれも決定打にはならない。
そして次の瞬間だった。

僕の体がふわりと持ち上がり
「コロモリ!ねんりき!」

ドゴォ!

地面へとたたきつけられた。
『うそ!?けんぞく!!??』
僕は…薄れる意識の中、駆け寄るトワ様の姿を見た…

目が覚めた時、そこはターフタウンのポケモンセンターだった。
「はい、預かったポケモンはみんな元気になりましたよ。」
『けんぞく…!よかったぁ…』
ジョーイさんに抱かれるぼくのもとに駆け寄ったトワ様。
『ごめんねけんぞく…きみがやられたのはトワの指示がいけなかったんだ…ごめんね…』
悲しんでいる…?
僕はただトワ様を笑顔にしたかったのに…
そんな顔をしないでよ…

ぼくが弱いから…？
ぼくが弱いせいで…
トワ様が悲しんでいる…？
（弱くって…ごめんね…）
ぼくは気が付けば涙を流していた…
情けなかった…
笑顔にしたいと願った女の子は目の前で悲しんでいる。
ぼくのせいだ…
強くならなきゃ…
もっと…もっと強く…！
もうトワ様を悲しませないために!!!

＃3　挑戦！バウタウンジム！

バウタウンにたどり着いたぼくたち。
ここにはガラル地方の伝統行事である【ジムチャレンジ】のジムの1つがあるらしい。
そしてここのジムのトレーナーは水ポケモンを使用する。
そう、水タイプをだ
『水のジムかー、眷属やビビの出番だね！』
そう、ぼくはでんき・どくタイプ、ビビちゃんはくさ・ゴーストタイプ
ぼくならばこちらからの攻撃は相性がいいし、
ビビちゃんは水技に強い。
ぼくとビビちゃんが今回のジムの主戦力となり、
ジムチャレンジへと挑むことになった。
『はえー…中綺麗だねぇ…ここのジム、ね？けんぞく。』
ぼくを抱きかかえるトワ様はそう問いかける。
確かにきれいな場所だ。

でも僕にはそんなもの眼中になかった。
ここはぼくの名誉挽回の場だ。
ここで活躍して…トワ様を笑顔にするんだ!!

「ようこそバウタウンジムへ!私の華麗な水技受けていただきます!」
『オッケー!トワとけんぞくなら負けないよ!いこ!けんぞく!!』

ジムチャレンジはそれぞれのジムごとに内容が異なるらしい。
ここ、バウタウンジムは迷路を攻略しながらジムトレーナーとポケモンバトルをすること…
「オタマロ!エコーボイス!」
『ほっぺすりすり!』
オタマロのはなつ音波に圧されながらもぼくはほっぺを擦り付ける!
追加効果のマヒもあってか動きは鈍っているようだが
「オタマロ!りんしょう!」
『…っ!けんぞく!もっかいほっぺすりすり!!』

ぼくより奴のほうが早かった、りんしょうでかなり体力を削られたが返しのほっぺすりすりが直撃する。
オタマロは体を痙攣させながらダウンした。
『けんぞくナイスゥ！えらいよー！』
やった！トワ様が喜んでいる！
いや、油断するな…
まだ一人目のトレーナーを倒しただけ…
さっきもその油断で負けたんだ…！

『けんぞく！ようかいえき！』
「あぁ!?クラブゥ!?」
２人目のトレーナーのクラブを苦戦しつつも撃破。
流れは来ている…！
「ヘイガニ！バブルこうせん！」
『やばい！けんぞく避けて！』
バブルこうせんの直撃を受けぼくは倒れる。

また負けた…
が、トレーナー戦の後トワ様はぼくにげんきのかけらを与えてくれた。
ボロボロだったぼくの傷はたちまち回復し、ぼくはトワ様によちよちと寄っていく
『またミスっちゃったなぁ…一緒にがんばろ？大丈夫、けんぞくは強くなれるよ！』
前なら泣いてたかもしれない。
泣いたらだめだ！
トワ様を泣かせることになる！
ぼくは悔しさをかみしめながら次のトレーナー戦へと向かう。

「テッポウオ！うずしお！」
『あぁぁぁあ!!!?
!!!』けんぞく

渦に飲まれるぼく、
トワ様はあわあわと声を震わせながら駆け寄ってくる。
ごめんね…弱くって…

そんなぼくを治療してくれたトワ様はいよいよバウタウンジムのジムリーダー、ルリナと対峙する。
「わたしのミッション、控えめに言っても難しいのによくクリアしたわね。その冴えた頭で挑もうとも私のパートナーたちがきれいにすべて流し去ってあげるから！」
『どうだろうね！いくよ！すなぎも！』

ぼくはトワ様の横ですなぎも先輩やビビちゃんの戦いを見守る。
２人ともルリナのポケモンに一切引けを取らない。
すなぎも先輩やられてしまったが、たつのこ先輩やビビちゃんが頑張ってくれている…
【ぼくはまた…見ているだけ…】
小さなこぶしをぼくはぎゅっと握り占める…
そしてルリナの３匹目カジリガメがダイマックスの姿でくり出される。
トワ様のメンバーはここまでの戦闘でかなりのダメージを受けていた
『みんな消耗してる…このままじゃ…』

トワ様が困ってる…
ぼくにできること…
それは…!
ぼくは…ぼくはトワ様の足のしがみついた!
『ん?けんぞく?どうしたの?もしかしてバトルに出るつもり!?』
コクリと首を縦に振った。
『で、でも…あいつのダイマックス技けんぞくじゃ耐えられないよ…!やられちゃうよ!』
【それでいい…それでいいんだよトワ様!】
ダイマックス、それは3分間の間ポケモンを巨大な姿に変える不思議な現象。
そうぼくに今やれるのは
己を犠牲にしてでもトワ様に勝利を届けることだ!
「どうしたの?交代するなら早くしてくれないかしら?」
『くっ…!けんぞく…ごめん!お願い!今はダイマックスを切れるまで時間を稼がなきゃ!!!』
ぼくはスタジアムのバトルフィールドに飛び出した。
目の前にいるのは自分の何倍も大きいダイマックス状態のカジリガメ

正直足が竦んで動けない…
でも…逃げない!
ここで逃げたら!
強くなってトワ様を笑顔にするなんて出来ない!!!!
「ポケモンが時間稼ぎのため自ら犠牲に…残酷だけどいい戦略ね。トワちゃん、いいポケモンと出会ったわね…エレズン!あなたの覚悟は受け取ったわ!カジリガメ!ダイアタック!」
カジリガメの強烈な一撃に僕の意識は一瞬で消し飛んだ

『…ありがとうね…けんぞく…』
トワは下を向く…
唇をかむ
『自分が未熟だとか…そういうの反省するのは…あとでもできる!べこら…たつのこ…行くよ…!けんぞくが自分を犠牲にして繋いでくれた!絶対に負けらんない!』

「その目、いいね！楽しくなってきた！」
『いっけえええええええええええええええええええええええええ!!!!!』

「カジリガメ戦闘不能！勝者は！チャレンジャートワ！」
『しゃあああああ！たつのこ！やったよ！勝った！勝ったよ！』
ぼくが目を覚ましたその時、トワ様はルリナさんに勝利し、歓声の中にいた。
よかった…
トワ様は笑ってる…
『あ！けんぞく！起きたんだね！あんたのおかげで勝ったの！ありがとう！ほんとありがとう!!!』
トワ様はそう言ってぼくを抱きしめてくれた。
いつもより痛いくらい強く、でも温かく抱きしめてくれた。

そっか、ぼくひとりが変に頑張る必要なんてない…
トワ様の笑顔のためにできるのは決してぼくひとりでやる必要なんてないんだ。

ぼくの初めてのジムチャレンジはみんなで掴んだ勝利で終わった。

＃4　進化の光！エレズンとストリンダー！

バウタウンのジムチャレンジを突破したぼくたちは破竹の勢いでエンジンシティのカブを破った。
残念ながら僕の出番はなかったけれど、
たつのこ先輩の独壇場というか…
あの人は本当に強い。
ジムリーダーカブの操るほのおタイプを一撃で沈めるその姿を
ぼくはトワ様の隣に座り込み、
ただ見ているだけだった。

ここにきてまた欲がわいてきたのかもしれない。
もっと強くなるためには…
【ぼくも…進化したい!!】

と、意気込んではみたものの
その後も４つ目のジムラテラルタウンに向かう道中も
ぼく自身に目立った活躍はなく…
『たつのこ!たきのぼり!』
『べこら!ニトロチャージ!』
『トワンテ!シャドーボール!』
進化してパワーアップした先輩たちが活躍する姿をぼくは見ているだけ…
【どうして…僕はいつ進化できるんだ…】

やっと出番を与えてもらっても、
ぼくがうたれ弱いばっかりに何度もやられてしまった…
でも前ほどへこむことはなくなったかもしれない
なんでかって?
それはね

『みんな～！カレー出来たよ～！』
道中のキャンプで食べるトワ様のカレーだ。
トワ様の作るカレーがぼくは好きだ
いつも愛情込めておいしいカレーを作ってくれる。
それを食べると、不思議と力が湧いてくるんだ。
『次のジムはかくとうタイプのジムだってね～だとトワンテとすなぎもの出番だよね～。』
カレーを食べる手が止まった
知ってた…
次のジムも相性有利の先輩二人が活躍するのはそりゃあ当然だよ…
仕方ない…
仕方ないんだ…

ラテラルタウンについたぼく達は再びホップと対峙する
だが、以前の彼とは違い浮かない表情だ。

それもそのはずだ、同じジムチャレンジの挑戦者であるビートにバトルで敗北し、
更にはホップが弱いことで現チャンピオンであるダンデのことがバカにされるとまで言われてしまったのだという。
正気でいるほうが難しい。
「トワ…俺さ…アニキがバカにされるって話、どうすればいいかわからないぞ…」
『ホップ…』
『わからないけど…オレは強くなるしかないよな!だからあれこれ試す!オマエで確かめさせてくれ!』
『オッケー…でも手加減しないかんね!』
「当然だ!!!」

激戦を繰り広げるホップとトワ様
ぼくはまた…見ているだけ…
進化さえ…進化さえすれば…
ぼくだって!

たつのこ先輩の滝登りでホップの最後のポケモンが倒れた
『やりぃ！ナイス！たつのこ！』
トワ様がたつのこ先輩を撫でると、こっちを振り向き声をかける
『今のすごかったよ！けんぞく、今の見てた？…けんぞく？』

その時だ
ぼくの体が光を放つ
なんだろう…不思議と心地いい光だ…
温もりに包まれているようなそんな感覚の中
ぼくの手足が伸び、背丈が伸び
青白いトサカが伸びる
『……けんぞく？』
そう
進化の光だ
ぼくはエレズンからストリンダーに進化したんだ！
【やっと進化出来た！これでトワ様も僕をかっこいいって！褒めてくれるはず！】

『……』

あれ

トワ様?????

なんで固まってるの？

進化したんだよ!?

かっこよく!強くなれたんだよ!!?

なんかこう

〈きゃー!けんぞくかっこいいいいいい!すてきー!〉

とか!

〈やだぁ!めっちゃイケメンになったじゃん!〉

とか!!

〈立派に育って…トワ嬉しいよ…!〉

とかあああ!!!
そういうリアクションは!?
なんで無言なの!!!!???
せめて何か！
何かリアクションして!!

『イヤ、ウン、ケンゾクツヨソウニナッタジャーン』
うん…
わかってた
なんか可愛くなくなったのは自分でも思ってた…
トワ様…可愛くなくなってごめんね…

＃５　泣かせない！けんぞくのド根性！

やぁ諸君、お元気だろうか、
ぼくはエレズンから進化してストリンダーになった。
トワ様は絶句していたけれど、晴れてぼくも進化組の仲間入り！
のはずだった…

実はあの後、ぼく以外にも進化したポケモンが居たんだ…
『あれ!?べこら!??!!』
そう、べこら先輩だ…
ラビフットからエースバーンへの進化
『……』
トワ様のリアクションは相変わらずだったけど
でも嬉しそうって部分は伝わってきた。

と、いっても最終的にぼくもべこら先輩もラテラルタウンジムでは補欠組

特に出るまでもなくトワンテさんとすなぎも先輩が圧倒しあっさり突破した。

その後、ジムチャレンジャーのビートが遺跡を破壊しようとした騒動が起こるも、
その時のぼくはボールから出ることすらなかった。
進化したら即戦力になれるはずじゃなかったのか…
そう信じてここまでやってきたっていうのに…
なにか間違っていたんだろうか…

次に向かうはジムリーダーポプラがジムを構えるアラベスクタウン。
その道中、ぼく達はルミナスメイズの森という不思議な森を抜けようとしていた。
森の中には不思議な胞子を付けたキノコがそこら中に生えていて、
キノコに触れると胞子が光を放ち、まるで街灯のようになっていた。
『神秘的できれいなとこだね～、でもちょっと不気味かも…』
トワ様はこういう暗くて不気味なとことか苦手なんだろうか？
悪魔なのに？

まぁそれはそれでいいか、
トワ様の可愛い一面が見れた気がするし、ヨシ!
そんなことを考えていた時だ
『ん?あのキノコだけなんか色が違う?でも明かりつけなきゃだしなぁ』
トワ様がピンクがかったキノコに触れようとしていた
まずい!あのキノコの裏…何かいる!
僕は思わず駆け出していた、
が、トワ様はすでにキノコに触れてしまっていた。
後ろに隠れていた何かが飛び出す!
『キャッ!?なにこいつ!?』
【こいつはたしか!そう、ベロバーだ!】
森に入った以上は覚悟してたが野生のポケモンもこの森の特徴を生かして暮らしている。
明るいキノコの裏に隠れていたずらしようとしていたのだ。
【トワ様にいたずらしやがって!】
『応戦するよ、けんぞく!ようかいえき!』
【くらえってんだよ!】

ようかいえきが直撃し、ベロバーはふらつく、が
あと一歩倒しきれない。
ベロバーのいばるが決まり、ぼくの頭の中に怒りの感情が湧いてくる
『けんぞくしっかり！もう一回ようかいえき！』
【……！なめんなぁ！！！】
攻撃は見事命中し、ベロバーは逃げ去っていった。
『けんぞくやるぅ！つよつよで偉いぞ～！』
そういってトワ様は手を伸ばしてぼくの頭を撫でてくれる。
エレズンの時からそうだけどこうして撫でられるのはすごく好きだ。
『しかしあのキノコは要注意だね、次は気をつけなきゃなぁ…』

そこからのぼくは
『けんぞく！どくどく！』
トレーナー戦や、ルミナスメイズに生息するフェアリータイプを前に
『けんぞく！ようかいえき！』
無双する！

『けんぞくううううううううううううううう!』
のも一回打ち止めだ
なんでだよ…なんでテブリムいんだよ…
エスパーはきついよ! 一撃で消し飛んだよ!

ポケモンセンターでの治療を受け再び森の中へ、
時間も遅かったため今日は野宿をすることに。
『よーし!今日もおいしいカレー作ってあげるかんねー!』
【よっしゃ!トワさまのカレー!】
ぼくは思わずカレーをかきこむ
うまい…うますぎる!!
!!
『そうだ、けんぞくは次のジムはメインで行くよ。』
【え?】
『さっきジョーイさんに聞いたらね、次のジムのポプラさんってフェアリータイプの使い手なんだってさ、だからさ進化したけんぞくには格好の活躍の場じゃん?』
【トワ様…】

『負けてばっかりでさ、悔しい思いしてるのはトワも一緒だよ?だからさ!ここでいいとこ見せつけちゃお!』
【…!うん!】

次は…ぼくがメイン!
誰でもなく!ぼくが!
『よーし、みんな片づけたら寝るよ〜。』
トワ様が明かりを消してテントに消えていく。
だがぼくの中の胸があったかくなる気持ちは、なかなかおさまらないまま夜は更けていった…

朝、アラベスクタウンへ向かうのを再開したぼく達。
そこへ一匹のポケモンが立ちふさがった。
『何あいつ!?ロン毛!?きもっ!!!』

【ギモー！ベロバーの進化系か…】
［おうおう、昨日はうちのもんが世話になったのぅ…うちのシマで暴れといてただで通れると思うなや！］
どうやらこの縄張りを仕切っているギモーのようだ
ベロバー達がやられたのが気に入らなかったんだろう。
【上等だ！】
『なんでこっちくんの！やっちゃえけんぞく！ようかいえき！』
ようかいえきはフェアリータイプを持つギモーには大ダメージだが
［それがなんじゃい！わしのどげざづきをくらいなぁ！］
ギモーの反撃がぼくの腹に直撃する、
こいつ口だけじゃない…ここらを仕切るだけの力があるのは本当みたいだ。
『うーん！きもいけど強いのには違いないよね…こうなったらゲットするよ！ＧＯ！モンスターボール！』
モンスターボールが命中し、ギモーがボールへと吸い込まれる。
が、ボールは揺れることもなくギモーが中から飛び出す。
［わしをゲットしようとしたことは褒めたるわ！だがのぉ！］

再びギモーのどげざづきがぼくを襲う。
ボールから出た直後の動きで回避できなかった。
足がふらつき、ぼくは片膝をついてしまう
『けんぞく!?もー!なんなんこいつぅ!もっかいお願い!ＧＯ!モンスターボール!』
ボールは再びギモーに命中、ボールに吸い込まれるが
ギモーのゲットには至らない。
［へっ!ポケモンが未熟ならトレーナーも未熟じゃの!とどめじゃい!］
３度目のどげざづきがぼくに命中…さすがにこれは…
耐えられ…
『けんぞく!!!!』
【トワ…様…!】

〈『ごめんねけんぞく…きみがやられたのはトワの指示がいけなかったんだ…ごめんね…』〉

これじゃ…あの時と一緒だ
進化したからなんだ
今まで通りでいいのか？
このままでいいのか？
それで…良いわけがないだろう！

［なに!?］
【へへっ…まだ…いけるや…】
ただ立つことしかできないほどの力しか残ってないかもしれないだけど…倒れたらまた!!!
トワ様が悲しむんだよ!!!
【来いよ…ギモー…何度だって…受けてやるよ…】
［…前言撤回やな…肝の据わった面白いやつやわ…お前…］

『けんぞくもういいよ！戻って！』
トワ様はぼくをボールに戻した。
それでもいい…

勝てはしなかったけど…
トワ様が悲しむ顔を見なかっただけでも満足だ…
ボールに入った僕は目を閉じ意識を失った。

目が覚めたらそこはアラベスクタウンのポケモンセンター
ジョーイさんの治療を受け、ぼくはトワ様のもとに戻る。
【トワ様…】
『もう…無茶するんだから…』
悲しませはしなかったけど心配をかけてしまったかもしれない。
そこは反省している。

『でもさ、トワのために無茶してくれたんだよね。ありがとう…！かっこよかったよ！』

【!!!】
『次！ジムチャレンジはさ、けんぞくがちゃんと休んでからにしよ！いい？』
【トワ様…！】
だめだ…泣くな…
ここで…泣くんじゃない！
トワ様の言葉にぼくはあふれそうな涙をこらえる、
歯を食いしばって、こぶしを握り締めて、
堪えきったところで漸くトワ様に向き直った。
するとトワ様は拳を差し出す。
『ポプラさんは強敵って話だけどさ、けんぞくとトワなら！やれないことなんてないよ！』
ぼくは首をタテにふると
差し出された小さな拳に、ぼくの拳を合わせた。
次のジムチャレンジで絶対勝利を届けるぞという、決意を胸に…

＃6　激突ダイマックス！ＶＳポプラ！

ごきげんよう皆さま
ぼくことけんぞくは胸が躍っていた
そりゃあそうだ
一世一代の見せ場
ぼくがメインのジムチャレンジ
『けんぞくは一旦待機ね。まずはビビでジムチャレンジの様子を見るから。』
【了解です！】
ジムチャレンジ前、アラベスクタウンの民家で手に入れた（しんかのきせき）
そのアイテムの力もあってビビちゃんの耐久力は比にならないものになっていたのもあり、急遽ではあったがジムチャレンジメンバーの先鋒に抜擢された。
アラベスクジムでのジムチャレンジはジムリーダーポプラから出されるクイズに答えながらトレーナーをバトルで倒すという異色なもの
「問題！フェアリータイプが苦手なのはどくとはがねどっち？」
『よゆー！どくタイプ！』

「ふっ、正解だよ」
「わたしが毎朝食べてるのは？」
『は!?なにそれ!?えーと！オムレツ!?』
「おや、正解だよ」
『いや当たってんのかい!!!』

トワ様はクイズの翻弄されつつもジムトレーナーを順調に倒していくトワ様
ぼくの出番は、近づいていた！

アラベスクスタジアムの中心
ジムリーダーポプラが目を閉じ立っていた。
「クイズに答えたあんたのリアクション見させてもらったよ…最後の試練はあたし、相棒のポケモンにどんな振る舞いをさせるのかちょっと見せておくれよ。」
『オッケー！しっかり見せつけて！そして勝つ！』
『威勢がいいね、行きなマタドガス』

「ＧＯ！ビビ！」

「ブブー！残念だね」
『だあああああああ！さっきからバトル関係ない質問ばっかじゃん！』
「ほれ、そんなこと言ってる元気あるならバトルに集中しな」
『むきいいいいいいいいいい！』
バトルは決して負けていない
が、ポプラの質問攻めで精神的に追い込まれていく。
ポプラの２匹目がダウンしたとき、トワ様が動いた。
『頃合いかな…けんぞくいくよ！』
【オッケー！待ってたよトワ様！】
「フェアリータイプに対してどくタイプをぶつけるかい…セオリー通り、いい判断さね。」
ポプラがくり出したのはトゲキッス
相性ではこっちが断然有利だ。

「トゲキッス、げんしのちから」
　宙に浮いた岩石がぼくに襲い掛かった
　ぼくは直撃を受けるが大きなダメージにはならない
『けんぞく！新しい力見せつけるよ！』
【おっしゃあああああああああああ！】

『【ほうでん！】』
　激しい電流がトゲキッスを襲う
　一撃とはいかなかったがかなりのダメージだ。
『ガンガン行くよ！けんぞく！スパーク！』
【くらえぇ！】
　足に集めた電流をそのままトゲキッスにぶつけるように蹴りつける
　体を痙攣させながらトゲキッスはダウン

【次を倒せば…ぼくたちの勝ち！】
「最後の一匹だからなんだね、あたしに勝てるかのクイズは終わってないよ！行きな！マホイップ！ダイマックスだよ！」

ポプラのボールから現れたのは巨大なデコレーションケーキのような姿をしたダイマックスマホイップ
【でかい…が、それがなんだ！】
『まずは相手の出方を見るよ！どくどく！』
どくタイプの放つどくどくは必ず命中する！
マホイップはもうどくに置かされるもぼくに反撃してくる
「キョダイマックスしたこの子をあんま舐めるもんじゃないよ、マホイップ！キョダイダンエンだよ！」
巨大なお菓子が流星のように降り注ぐ
どくタイプのぼくには効果はいまひとつだが物量とそのパワーに圧されてしまう
【くそ！相性の上では有利だっていうのに！】

『大丈夫！』
【トワ様？】
『けんぞくは強い！トワをここまで連れてきてくれた！一緒に歩んできた！だからここ

はきみが決めるんだよ！

けんぞく！

ダイマックス!!!
!!!』

ボールに戻されるぼく
トワ様のダイマックスバンドが光り輝き
巨大化したボールが投げられる。

そう
ぼくは初めて
ダイマックスした!!!

【こいよケーキ野郎！ぼくが…この手で勝利をつかんでやる！】
「面白くなってきたじゃないかい、マホイップ！キョダイダンエンで迎えうちな！」
『行くよけんぞく！ダイアシッド！』
　お互いのダイマックス技が
　激しくぶつかり合うのを見て観客たちも大いに盛り上がる
（いいぞー！トワ様ー！）
（ポプラさんのマホイップもすげー！）
（トワ様！トワ様！！トワ様！！）

『聞こえる？けんぞく…これみんなトワ達への歓声だよ…』
【聞こえてるよ…みんなの声が……！】
『この歓声を上げさせたのは他でもなくけんぞく！だからさ！次で決めるよ！ダイアシッド！！！！』

【これでぇぇぇぇ！落ちろおおおおおおおおおおおおおおおおおお！】

俺は全身全霊の力を込めてダイアシッドを放つ

マホイップに直撃し、爆発が起きる

「…（決まったかね…）」

煙が晴れると、中から元の小さい姿のマホイップがダウンした状態で現れる。

【やった…ぼくがきめた！はじめて！】

『けんぞく!!!!』

トワ様はぼくに飛びついて抱きしめてくれた。

『やったよけんぞく！ジムチャレンジクリアだよ!!!』

【トワ様…！ありがとう…！】

ぼくはトワ様に涙を見られないようううつ向いた

でもこれは悲しい涙じゃない

初めてジムチャレンジを自分の手でクリアした
それがうれしくて…トワ様を笑顔にできて…
堪えられなかったんだ！

「トワ…あんたいいポケモンに恵まれたね、その絆大事にするんだよ。」
『はい！ポプラさん！ありがとうございました！』

こうして僕たちのアラベスクタウンでの激闘は
幕を閉じたのだった。

＃７　あなたを詐欺罪と器物損壊罪で訴えます。理由はもちろんお分かりですね？あなたが皆をこんな裏技でだまし、セーブデータを破壊したからです。覚悟の準備をしておいてください。近いうち訴えます、裁判（ｅｔｃ

【…フン！】

『もー！けんぞくどうしちゃったの!?先行かないでよぉ！』

どうも皆さん、けんぞくです

どうしてこうなっているか…

時を戻そう

アラベスクタウンでのジム戦を終え、次なるジム
キルクスタウンへ向かう道中のことだ。
「トワ、トレーナーの俺が迷ってたらポケモンたちも力発揮できないよな…もっと頑張るぞ！」
『オッケー、ホップ！トワがまた相手したげる！』
ナックルシティを抜けたところでホップとトワ様がバトルをした直後のことだ
『ん？どしたんすなぎも？』
すなぎも先輩の様子がおかしかった
急に空高く飛び上がり
体が光を放った
『これって…進化の光!?』
「おおお！トワのアオガラスが進化するのか!!!」
【すなぎも先輩が進化…】

光の中からカラスポケモンのアーマーガアへと進化したすなぎも先輩が現れる
「おおおお！アーマーガア！かっこいいぞ!!!」
『…』

52　＃７　あなたを詐欺罪と器物損壊罪で訴えます。理由はもちろんお分かりですね?あ
皆をこんな裏技でだまし、セーブデータを破壊したからです。覚悟の準備をしておいて
い。近いうち訴えます、裁判（ｅｔｃ

トワ様はただすなぎも先輩をみつめていた

まぁいつものノーリアクショ…

『かっこいいいいいい!!!すなぎもぉ!!!かっこいいし強そうじゃん!!!』

「だなぁ！立派なアーマーガアだぞ！」

【あれぇ??????????】

ぼくの進化でも

べこら先輩の進化でも無言だったトワ様が

めっちゃ笑顔なんですが?????
え?????
なに?????
どうして?????
どうして…

それが第1の原因
すなぎも先輩の進化へのトワ様への反応の嫉妬。
素直に羨ましかったし、悔しい
ぼくのときはトワ様絶句していたのに…

それだけだったらキルクスタウンにつくまでで何とかなったんだろう。
だが、ぼくへの追い打ちが待っていた。

キルクスタウンにつながる8番道路の探索中のことだった

キャンプを終えたぼくたちの前に1匹のサイホーンが現れた
『サイホーン!地面タイプほしかったんだよね!ビビ!タネばくだん!』
いわ・じめんタイプのサイホーンには大ダメージ、ゲットするには最適な体力だ。
『オッケー!ＧＯ!モンスターボール!』
が、ボールははじかれてしまう。
『むむむ!意地でもゲットするんだから!』
その後もいろんなボールを投げるトワ様だが、
サイホーンは一向にゲットできない。
『こうなったら!とっておき…ヘビーボールで!』
重いポケモンほどゲットしやすいボール、
ヘビーボールをサイホーンに向けて投げつける
『これでこんどこそ…ってぇ!?なんでまた出てくんのよー!!!!』
ヘビーボールへの期待も空しくサイホーンはボールから出てしまう
『これで!今度こそ!つかまってええええ!』
トワ様のハイパーボールに吸い込まれ、ボールはゆっくりと揺れ…
カチッ…!
ボールの閉まる音がした

『やった！サイホーンゲット！みんなもお疲れ様！』
【ゲットできたか…よかった…】
ぼく？
どく・でんきのぼくが地面タイプの前に立てるわけがないじゃないかＨＡＨＡＨＡ
『よぉし、みんなーこの子の名前決めるよー！』

トワ様は空に向けて語り掛ける
もはや、これも見慣れた光景だ
ツッコむこともない

『よし！あんたは今日からワザップ！今までうちのメンバーが不利だったでんきタイプへの対処はあんたに任せた！』
【ワザップ…？なんだそれ…】
なんだろう…
初めて聞くはずなのに不思議となじみのある言葉に聞こえる。

56　＃７　あなたを詐欺罪と器物損壊罪で訴えます。理由はもちろんお分かりですね?あ
皆をこんな裏技でだまし、セーブデータを破壊したからです。覚悟の準備をしておいて
い。近いうち訴えます、裁判（ｅｔｃ

『ワザップ、頼りにしてるかんね。』
【むむむ…まただ…またトワ様…】

なんだろ
つまんない

そして今に至る。
自分でも正直おかしいと思ってる

嫉妬
自分でわかっててもー

新人や進化した先輩がトワ様に褒められたりしているのを見ると羨ましい…
最近自分が活躍したんだからもっとトワ様の隣にいたい…
いろんな感情がごちゃごちゃになってトワ様を突き放してしまってる
『ちょっと、けんぞく！いい加減にしな！』
【!?】

トワ様が
怒った…？

『新しいメンバーが入ってそれが面白くないのもわかる！
進化した仲間に嫉妬してるのもわかる！
でもねけんぞく！

58　＃７　あなたを詐欺罪と器物損壊罪で訴えます。理由はもちろんお分かりですね?あ皆をこんな裏技でだまし、セーブデータを破壊したからです。覚悟の準備をしておいてい。近いうち訴えます、裁判（ｅｔｃ

きみはきみだよ!
けんぞくは他のメンバーにはなれないけど
それは他もおんなじ、トワのために必死になってくれるけんぞくがトワは大好きだよ。
そのままのけんぞくでいいの。
だからさ、一緒に、ね?』

【はぁ…やっぱ、トワ様にはかなわないや…】
この人をご主人様にした時から思ってた
この悪魔
マジ天使…

『けんぞくさぁ、あんま嫉妬深いとこの先苦労するよ?先は長いんだからね?』
【善処します…】

＃8　砂塵の激闘ＶＳキバナ！

皆さんごきげんよう、ぼくです
けんぞくです。

６番目のジム、キルクスタウンジム
７つ目のジム、スパイクタウンジム
このジム戦におけるぼくの活躍はなかった。
とはいえ、スパイクタウンへ向かう道中は水辺だったこともあり、
水ポケモンに対してぼくは大活躍！
ワザップも戦いの中でサイドンに進化したし
ぼくとは違った姿のストリンダーと出会ったり、
ライバルであるホップ、マリィとの激闘も語りたいところではある。
だが、それを考えてる時間なんてない。
ぼく達にはガラルリーグ最後の関門
ナックルジムのジムチャレンジが控えていた。

〈天の声です　キルクスタウン、スパイクタウンでの激闘は！トワ様の生配信ＵＲＬをあとがきに添付するので君の目で確かめてくれ!!〉

ナックルジムへの挑戦前日、トワ様はキャンプでぼくらに声をかける

『いよいよ最後だね、みんな…トワはさ今いる君たち６匹と一緒にトーナメントに行くよ。』

ポケモンたちはみんなトワ様の話を目を見つめて聞く

いつになく真剣なトワ様の表情

それだけ大事な戦いが控えているのをぼくらも感じ取っていた

『チャンピオンに一番近いって言われてるのが今度のジムリーダー、キバナさん…正直勝てるかはわかんないけど…トワはね…君たちとなら！絶対勝てるって思う！だから皆も！トワを信じてついてきて！』

【当たり前だあああああああああああああ!!!!!!】
ポケモンたちは各々雄たけびを上げる!
皆気合十分、明日が勝負の時だ…

ナックルジムのジムチャレンジはほかのジムと異なりダブルバトル主体。
ドラゴンタイプのジム、ということにはなっているが
実際には天候変化を利用したコンボ主体のジムだ。
ジムトレーナー1人1人が天候をうまく扱ってくるため苦戦はしたが、たつのこ先輩やワザップの活躍もあり無事突破!

ジムリーダーキバナ戦を残すのみとなった!

『キバナさん、久しぶりだね…』
「トワ、ダンデの紹介でお前に会った日からお前の活躍は風の噂で聞いていたよ。」
『そりゃ光栄だね、ならわかると思いますけど…トワ、強いですよ?』

「へっ！言うねぇ、そんだけ大口叩けるならオレに負けても騒げるだけの元気あるだろ？」
『トワそういう冗談苦手なんだけど？』
「ハハハハハ！わりぃわりぃ、しゃべりすぎたな…じゃあ最後に一言

上には上がいるの教えてやるよ！フライゴン！ギガイアス！」

『ワザップ！たつのこ！』

キバナはギガイアスの特性、砂おこしを使い自分に有利な天候へと変化させる。
だが
【それはワザップも同じだ…決してこっちだけが不利なわけじゃない！】
キバナの戦術に無駄はない。
ギガイアスが倒れ、砂嵐が止んでも後続で出て来たサダイジャ。
サダイジャの特性すなはきは自身がダメージを受けると天候を砂嵐に変える
砂嵐が止んだ時のケアも完璧だ

砂嵐で徐々にトワ様の手持ちも消耗していく

『くっ…手持ちの数では有利だけど…』

「あぁ、まだ俺もダイマックスが残ってるからな、ジュラルドン!キョダイマックス!」

キバナは最後の1匹、ジュラルドンを繰り出しキョダイマックスさせる。

まるで高層ビル化のような見た目に代わったジュラルドンがじわりじわりとこちらにせまってくる。

「ジュラルドン!サイドンにダイナックル!」

『ちょ!それはまずい!ワザップ避けて!』

「指示がワンテンポ遅いぞ!」

トワ様の指示が届く前にワザップはスタジアムの壁にたたきつけられダウン。

『くっ!ビビ!』

「バケッチャ?まぁいい、先に厄介なギャラドスから先にやらせてもらうぜ?ダイロック!」

『ビビ!サダイジャにタネばくだん!』

たつのこは迫りくる巨大な岩壁をよけきれずダウン

が、ビビの放ったタネばくだんもサダイジャに直撃しダウンする。

「おいおいおい、そんなんで勝つつもりか？」
『…勝つ！絶対に！行くよけんぞく！』
「ストリンダー？耐久低いポケモンでわざわざ壁にでもしに来たか？」

【壁役？何が悪いもんか！これは…勝利への大事な大事な布石だ！】
『けんぞく！ビビ！奴のダイマックスはあと１分、ここしのげば行ける！トワを信じて！』
【了解トワ様、意地でも耐え抜く！】
「ハハハハハ！ほんと面白いなお前ら！ジュラルドン！ダイロック！」
『けんぞく！』

再び現れる岩壁

ぼくはそれを

受け止めた

砂嵐で手足にガタが来る

そんなの関係ない！

ここを耐え抜くのが今のぼくの役割だ！

「なに?!俺のジュラルドンのダイロックを耐え抜いた!?」

『ナイスだよ！けんぞく！』

あとは任せましたぜ……！先輩方！

『べこら！ニトロチャージ!!!』

ダイマックスの解けたジュラルドンへ向け、べこら先輩がが炎をまとって突撃

その強烈な攻撃にジュラルドンはダウンする。

「ジュラルドン!?」
「ジュラルドン戦闘不能！よって勝者は！チャレンジャートワ！」
『しゃああああああああああ!!!!!!!!』
「やられたよ、次はシュートシティでジムチャレンジャー同士のセミファイナル、そして俺たちジムリーダーの松ファイナルトーナメントが待ってる。」
『勝ち抜くよ、絶対に』
「残ったメンバーは当然強敵ばかりだ、それはジムリーダーたちも同じ…それだけじゃない、その先にはさらにダンデが言える。」
『それでも、トワとこの子たちならやれる！』

「その目、やっぱいいな気に行ったよ。絶対に負けんなよ?俺にリベンジされるまでは絶対にだ。」

『約束はできないけど、その時もまたトワが勝ちますから!』

トワ様とキバナが握手

スタジアムは歓声に包まれた。

【残るはセミファイナルとファイナルのトーナメント…そして…チャンピオンダンデ!!!】

こうして８つのジムバッジを集めたトワ様、

トワ様が頂点に立つための戦いの決着は近づいていたんだ…

＃９　剣と盾交わるとき！ＶＳムゲンダイナ！

やあ皆さんごきげんよう
ぼくです、けんぞくです
セミファイナルトーナメントを迎えたぼく達はライバルであるマリィ、ホップとの激闘の末勝利。
大会委員長ローズの秘書、オリーヴの妨害を受けるも、バトルの末これを退けた。
そして翌日、ジムリーダー７人とのトーナメントであるファイナルトーナメントへと進出した。
ポプラさんの指導の下、ジムリーダーとなりスタジアムに乱入したビート、そしてかつて対戦したジムリーダー達、
ルリナ、サイトウ、キバナとの戦いを制し、チャンピオンダンデとのバトルを残すのみとなった。

〈聞こえるかい諸君？私は天の声、大変申し訳ない。実はここまで物語を大幅にカットしてしまった。

なぜかって？

けんぞくの出番がない

だが！元動画は熱いバトルがてんこ盛りだ！ぜひともあとがきのＵＲＬから元動画をチェックしてくれたまえ！〉

スタジアムはチャンピオンの戦いを前に歓声に包まれていた

しかし

突如モニターに大会委員長であるローズが映し出される。
「ハロー、ダンデくん、トワくん」

「ローズ委員長…」
『ローズさん…!?なんで…』

「ガラルの未来を守るため、ブラックナイトを始めちゃうよ！ただ、ブラックナイトのエネルギーが溢れ出して危ないんだよね！ダンデ君が話を聞いていたらこんなことにはならなかったのにね!!」
「くっ！委員長!!」
　ダンデはモニターのローズ委員長をにらみつけると
「トワ、オレは委員長を止めに行く。」
『トワも行く！ローズさんなんか変だった！止めないと！』
「いや。こっからはオレのチャンピオンタイムだ…オレが委員長を止める！」
　そういうとダンデは相棒のリザードンの背中に飛び乗り、その姿はすぐに見えなくなった。

「トワ…さっきのナックルスタジアムだよな…オレ…どうしたらいいんだ…トワにも勝てないオレに何ができるんだ…」
『ホップ、やろうよ！トワ達でブラックナイトをとめるの！』
「ブラックナイト…そうだ！英雄の像！まどろみの森で見たあの時の変なポケモン！」
『うん、それしかないよ…すなぎも！いくよ！』
トワ様とホップはそれぞれアーマーガアに乗りまどろみの森へと飛び立っていく。

『覚えてるホップ？』
「ああ…オレたちの旅はここでウールーを探して…ここにいた不思議なポケモンと出会ったのがすべての始まりだった…」
『なんかの運命だったのかな？剣と盾のポケモン…2人のトレーナー…』

「難しいことはわかんない、でもブラックナイトを止めるにはそれしか手掛かりはないしな。」

トワ様はうなづくとまどろみの森の奥地へと足を踏み入れていく。

「あ！トワ！ホップ！こっちこっち！」
『ソニアちゃん！』
そこにはマグノリア博士の孫、ソニアの姿があった。
「多分ここだよ、剣と盾の英雄の眠る場所…」

『ボロボロの剣と…盾？』
「…オレは盾を選ぶ、トワは剣だ」
『うん…、これで何とかなるかもわかんないけど…これしか手がないもんね…』
「アニキを追うぞ！ナックルスタジアムだ！」
トワ様とホップは再びアーマーガアに乗り、ナックルシティを目指す。

その道中、トワ様はぼくに語り掛けた
『けんぞく…トワさ、今すっごい怖いんだ…』
【トワ様…】
『ブラックナイトってよくわからないやつのこと…ほんとに止められるのかな…』
トワ様の表情が曇る
珍しく弱気なトワ様…
ぼく達を叱咤激励してくれるトワ様が…不安がっている
ぼくはトワ様の頭にポンと手を置く
『けんぞく…？』
【大丈夫…大丈夫…】
トワ様はぼくが泣いたとき、頑張ったとき、不安な時いつも撫でてくれた。
こんなことでトワ様の不安が消えるかはわからないけど、
ぼくにはこれしかできない…
『…ありがと…ちょっと楽になった。行こう！ブラックナイトを絶対に止める！』

ナックルスタジアムの地下
ローズ委員長はそこに立ち尽くしていた。
「来たんだね、トワくん。」
『ローズさん…』
ローズはゆっくりと振り返る。
その表情にいつもの気さくそうなローズの姿はなかった。
「１００年先、１０００年先このガラルの未来を守るためにはこれは必要なことなんだ。わかってくれ。」
『わかんないよ…！未来のために今必死に生きてる人たちをないがしろにしていいわけない!!!』
「まだまだきみは子供だ…わかってないんだ…」
『わかんなくなっていい！今はただ！ブラックナイトを止める！そのまえにローズさん！あんたも止めなきゃ！行くよべこら！ダイマックス！』

トワ様はべこら先輩を繰り出す
「…ダイオウドウ、キョダイマックスだ。」
対するローズ委員長は自らの相棒であるダイオウドウをダイマックスさせる。
お互いの相棒がダイマックスで対峙する。
勝負は一瞬だ…
『べこら!ダイバーン!』
「ダイオウドウ!キョダイコウジン!」
お互いの大技同士場ぶつかり合う、
地下にあったカプセルが技同士の環礁で起きた衝撃波で次々と割れていく。
『べこら!ここで押し勝つよ!ダイバーン!』
「むっ!!」
トワ様は間髪入れず次の攻撃を繰り出す。
ダイオウドウに直撃し、炎に包まれる

「みごとだ…トワくん…」
『ローズさん…最後わざと…?』

「いいや、私の判断が間に合わなかっただけの話だ…ブラックナイトの捕獲にダンデ君が向かっている、きみもそこのエレベーターから追うといい」
『…っ！行こう、けんぞく！』
【了解！】

「トワくん…きみとダンデくんのバトルを見れないのは寂しいな…残念だ…」

ナックルスタジアムの屋上
そこではダンデとブラックナイトが対峙していた。

「アニキ！」

『ダンデさん！』
「二人とも下がっていろ！今からこのブラックナイト…いや！ムゲンダイナを捕獲する！」
そういうとダンデはムゲンダイナに向けてボールを投げつける。
ボールの中に吸い込まれるムゲンダイナ、
ボールは左右に揺れる
「さすがアニキ！チャンピオンダンデだ！「!?リザードン！ホップをかばえ！」え？」
【トワ様危ない！】
『えっ？』
ボールは突如真っ二つになり、中から再びムゲンダイナが現れる。
『うそ…ボールが…』
「くそ！こんなやつどうやって…」
『でも、こいつを止めないと…ガラルが危ない!!』
そうだ…こいつを野放しにしたら…もっと大変なことになる!!
「けんぞく！まずは電撃でやつの足を止めるよ！ほうでん！」
【おらあああああああああああ!!!!!!】

ぼくは電撃をムゲンダイナに向けて放つ、
残念ながら麻痺させることはできない
「クロスポイズンが来るぞ！警戒しろ！」
【ぐっ!?】
ムゲンダイナの強烈なクロスポイズンに一瞬たじろぐが、どくタイプ同士は相性が悪い。
ぼくへ大きなダメージにはならなかった。
「けんぞくはそのままほうでん！たつのこ！こおりのきば！」
【頼んますぜ！たつのこ先輩！】
［シャーー!!カチコミジャーイ!!］
こおりのきばが決まりダメージを与えるがムゲンダイナはひるまない。
「なんか口から出てくるぞ！伏せろ！」
ムゲンダイナの狙いはぼく達ではなく
『えっ…嘘…』
「やばい！トワ！」
【トワ様!!】

トレーナーのトワ様だった

それをかばったのは

［トワサマハヤラセネェ！］

たつのこ先輩だった

【たつのこ先輩!?】
『たつのこだめぇ!!!』
ムゲンダイナの放ったダイマックスほうがたつのこ先輩に直撃、
クリーンヒットし一撃でダウンしてしまう
【先輩……!】
『許さない…けんぞく！オーバードライブ!!!』
【先輩の…仇だあああああああああああああああああああ！】

おれは胸鰭を震わせ、電気をこめた音波をムゲンダイナへとぶつける。
ムゲンダイナは空の渦の中へと引きかえしていく…

「なんだろう…これでは終わらない気がする…」
『うん…嫌な予感がする…』

渦から現れたのは

巨大な手のような生き物

「あれが…」
『ブラックナイト…ムゲンダイナの真の姿…』
その姿を目にした瞬間だった。
突然の悪寒と恐怖が一気に押し寄せてきた。
【!!!…なんだ…体から震えがひかない…】
『げんぞく大丈夫!?』
「俺のバイウールーもだ…くそ！」

ムゲンダイナの真の姿を前に、ぼく達は無力化されていた…

【そうだ…剣と盾！】

ぼくはトワ様のかばんから朽ちた剣を取り出しトワ様に渡す。

『あっ、そうか！２人の英雄！』

「そうだ！オレの盾とトワの剣！」

「『今こそ！交わる時!!!!!!』」

剣と盾は宙へと浮かび上がり、

雷を放つ

そしてその中から２匹の剣と盾を纏ったポケモン。

ザシアンとザマゼンタが現れる。

２匹のポケモンはムゲンダイナに向かって構える

『この子たちが…!?』

「２人の…英雄！一緒に戦ってくれるんだな！」

『すなぎも！けんぞく！ムゲンダイナを倒すよ！』
【了解！】
《ヤッゾオラー！スッゾーオラー！》
『ドリルくちばし！ばくおんぱ！』
「バイウールー！すてみタックル！」
ザシアンがきょじゅうざん、ザマゼンタがきょじゅうだん
それぞれのポケモンたちが各々の持てるすべてをムゲンダイナにぶつけていく！
【あとすこし！】
『もうちょっと！』
「オレが決める！」
【『「いっけえええええええええええええええええ!!!!!!!」』】

一斉攻撃をくらい、ムゲンダイナの動きが止まる。
「いまだトワ！ムゲンダイナを捕まえろ!!!!!!!!!」
『ＧＯ！モンスターボール!!!!!』
ダイマックスバンドの力で巨大化したボールにムゲンダイナが吸い込まれていく
１回…
２回…
３回…
ボールの揺れが、

止まった。

「や…やったのか？」
『う、うん…』
【終わったんだ…】

『ホップ！』
「トワ！」
『「やったぜ！ナイスゥ!!!!!!」』

ブラックナイト、ムゲンダイナによる騒動はこうして
２人の英雄と共に戦った２人の少年少女によって終息した。

そして３日後、運命の日をトワ様は迎える。
ファイナルトーナメントの最終戦
チャンピオン、ダンデとの戦いが！

最終話　頂点へ挑め!トワVSダンデ!

ムゲンダイナとの激闘のあと、
ローズ委員長は自らの罪を認め自首。
大会存続が危ぶまれたものの、
チャンピオンダンデの口添えもあり3日後ファイナルトーナメント最終戦を改めて行うこととなった。
チャンピオン戦を翌日に控えた夜。
トワ様はホテルを抜け出し、
ぼく達6匹のポケモンと星空を眺めていた。
『ついにここまで来たね、気が付けばダンデさんと戦えるところまで来ちゃった。』
トワ様は1匹1匹に声をかけていく
『べこらはトワの最初のポケモン、いつも一緒にいてくれたしずっと活躍してくれた。明日もよろしくね。』
「チャンピオンのポケモンもわからせるべこおおおおおおおおおおおお!」
『たつのこは怖そうな見た目だけどさ、すごく頼りになって皆を引っ張ってくれてあり

がと、明日も頼ることになっちゃうけどよろしくね。』
［ンン――・ワタシニカカレバ！ｃｈａｍｐｉｏｎのＰｏｋ▪ｍｏｎ！・デアロウトモ～クソザコデスネェ～！］
『ビビは進化出来ないって枷がありながらもここまで一緒に来てくれた。ありがと、明日もよろしくね。』
［明日も頑張る！の、段！・］
『ワザップは一番新人だけど持ち前のタフさと器用さでみんなをカバーしてくれてる。明日も頼んだよ。』
「なかなかマヒで動かなくても～ワザップは～わるｋ」
『すなぎもも最初のほうからずっとついてきてくれてありがと。明日もすなぎもの力借りることになるけどよろしくね。』
［あびゃびゃびゃ！がんばりまっする～！］
最後にトワ様はぼくの前に立った。
『けんぞくはいつもトワを体を張って守ってくれたり、トワのことをすっごく大事にしてくれてる。ありがとう』
【トワ様…】
『さびしがりなところとか、涙もろいところとか優しいところとか、全部ひっくるめて大

好き。だからさ、明日は笑顔で終わろうね。』

【はい！】

『明日はみんなで笑って！チャンピオンに勝つ！いくぞー！』

【「「「「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!!!」」」」】

翌日、シュートスタジアムの歓声は選手入場前から鳴りやまない。

ムゲンダイナとトワ様の激闘を観客も知っているからだ。

「トワ、きみがここに来ること…ハロンタウンで出会ったあの日から感じていたのかも

しれない。」
『またまた、そんな調子いいこと言ってる場合?ダンデさん。』
「いや、本心だよ。君は多くのポケモンと心を通わせてきたじゃないか。チャンピオンである俺ですら捕まえられなかったムゲンダイナをゲットして騒動を止めたのはほかでもなくきみだ。
そんな素晴らしいトレーナーと、今ここで戦えることが楽しみで仕方がない!」
『トワは負けませんから!楽しむことも!バトルも!』
二人は背を向け距離を話し向かい合う、
そして…

ダンデがマントを投げ捨てると

お互いに1匹目のポケモンを繰り出した
「行け!ギルガルド!」
『ＧＯ!ワザップ!』

お互いの一匹目が対峙する

観客の歓声は一層大きくなる。
『相性が不利…なら！戻ってワザップ！行くよ！べこら！』
「相性の有利不利を見越しての行動！きみならそう来ると思っていた！」
ボールから現れたべこら先輩にギルガルドが奇襲をかける
「シャドーボール！」
『かえんボールで反撃！』
ギルガルドのシャドーボールをもろに受けるべこら先輩、だがべこら先輩の攻撃も止まらない
［きていらあああああああああああああ!!!!］
かえんボールの直撃でギルガルドはダウン。
次にダンデが出したのは
「行くぞオノノクス！」
『なら！出てきてたつのこ！こおりのきば！』
「オノノクス！げきりん！」
オノノクスの強烈なげきりんを食らうたつのこ先輩
［ンンー！西成ダマシイイイイ！］
こおりのきばのクリーンヒットでオノノクスがダウン。

ここまでは順調だがこっちも消耗してきている
「さすがだなトワ、油断ならないよいくぞ!ドラパルト!」
『初めて見るポケモン…でもここは引いてらんない!たつのこ!こおりのきば!』
「積極的な姿勢は悪くない!だが甘い!１０万ボルト!」
ドラパルトは強烈な電撃を放ちたつのこ先輩に襲い掛かる。
たつのこ先輩はさすがに電撃に耐え切れない、
トワ様はとっさにたつのこ先輩を戻す。
『ありがとうたつのこ、いくよ!ワザップ!』
［ワザップはわｒ］
『じしんこうげき!!!』
強烈な地震で発生して岩の塊がドラパルトへ直撃、ドラパルトはダウン!
【すげぇ…これがチャンピオンとのバトル…まさに一進一退の攻防…】
「トワ、きみ相手にこいつを使う日が来ること、楽しみにしていた!行くぞインテレオン!」
くり出された４匹目はインテレオン

『あ!その子ってまさか!?』
「そう、あの時のメッソンさ。リザードンたちのもとインテレオンも強くなった!今こそその力を見せる!」
聞いたことがある
トワ様の旅の初日
選ばれなかったメッソンはチャンピオンダンデが引き取ったという話。
それがあのインテレオン…
『そりゃあ負けられない!行くよけんぞく!』
【了解!】
『けんぞく!ほうでん!』
「有利なタイプで来ること!それは確かに良策だ!だが応用がなってないぜ!インテレオン!マッドショット!!!」
マッドショット!?
まて!?それって!?
俺は無防備にもマッドショットの直撃を受ける。
どくでんきタイプのぼくにとって地面タイプの技は大ダメージ、耐えることが出来ずダウンしてしまう。

『けんぞく！大丈夫？』
【バトルには…復帰できそうにない…でも！見守る…！】
『…終わったらすぐポケモンセンターだからね！そこで見てて！トワが勝つところ!!!』

『いくよビビ！タネばくだん！』
「あくのはどう！」

あくのはどうの直撃を受けるビビちゃん…
本来なら倒れていてもおかしくないところ
だが！

［ぬっ！ここで負けるわけにはいかない！の、段！］

ビビちゃんはあと一歩のとこで踏ん張っていた。
ビビちゃんに代わり、
再びたつのこ先輩がくり出される。
『たつのこ!・こおりのきば!・』
［コレデフットベェ!］
こおりのきばがインテレオンにクリーンヒットし、
インテレオンは倒れる。
「トワ、本当に面白いなきみのポケモンたち!」
『当然!なんたって!・トワのポケモンたちですから!』
ダンデはふっ、と笑うと

「ならおれもそれにこたえていかなきゃな!・バリコオル!」
5匹目のポケモン、バリコオルを繰り出す
『いくよすなぎも!・ドリルくちばし!』
「フリーズドライ!」
［ドリルくちばし!・いきまっするー!!!!］
フリーズドライでダメージを受けつつも、すなぎも先輩の勢いは止まらない

ドリルくちばしの直撃でバリコオルはダウンする。

残るは、チャンピオンダンデの象徴とも呼ぶべきポケモン

「チャンピオンタイムは最後の一匹まであきらめない!行くぞリザードン!ダイマックス!」

『真っ向からぶつかるよ!たつのこ!ダイマックス!』

［ンホー!ダイマックスガンギマリナンジャーイ!］

リザードンとたつのこ、それぞれがダイマックスしてフィールドに現れる。

観客もポケモンもトレーナーの２人もボルテージは最高潮だ

「これが最後の攻撃であろうとオレはあきらめない!リザードン!ダイロックだ!」

「たつのこ!ダイストリーム!」

リザードンのダイロックをもろに受けたたつのこ先輩、

ふらついてはいるが反撃に出る

［クラエー！キユウスプラッシュオジサンストリーム!!!!!!!!!」
ダイストリームの直撃で水蒸気が発生
スタジアムは何も見えなくなった。

〈おいどうなったんだ!?〉
〈どっちがかったの!?〉
〈まさか…ダンデが!?〉

晴れたその場には
リザードンが倒れていた

「リザードン戦闘不能！よってガラル地方の新チャンピオンは！ジムチャレンジャートワ!!!!」

【や、やった…】

『やったあああ

【リザードン戦闘不能！よってガラル地方の新チャンピオンは！ジムチャレンジャートワ!!!!」

【や、やった…】

『やったあああ

思わずポケモンたちは自らボールから飛び出し、トワ様に抱き着いたりとびかかったり。

『みんな!やった!やったよ!チャンピオンだって!』

ぼくはそれを見つめる。

今回もぼくは活躍できなかったかもしれない。

でもそんなの、

いまはどうでもいい!!!!!

『けんぞく!チャンピオンだよ!チャンピオン!みんなで掴み取ったんだよ!』

だってぼくのご主人様は

今までで一番の笑顔なんだから!!!!!

ガラル地方チャンピオンダンデはこんな言葉を残しました。

「今ここに新たな伝説が生まれた！

すごい力を持つものなら！

どんな未来も描けるだろう！

トワが見せてくれる未来、みんなで楽しみにしようぜ!」

この先の未来は無限の可能性に満ち溢れている。
いいことも、悪いこともあるだろう。
でもそんな毎日も君となら乗り越えられる。
乗り越えてみせる。

そう、これは寂しがり屋の1匹のポケモンと、そのご主人様の小悪魔のお話

ＴＨＥ　ＥＮＤ